島根県簸川郡斐川町神庭西谷所在

荒神谷遺跡

銅剣発掘調査概報

年3月

育委員会

はじめに

島根県には貴重な文化遺産が多数残っています。島根県教育委員会ではこれらの文化財の保存・活用を進める一方、止むをえず開発事業に伴って遺跡が破壊される場合には、事前に発掘調査を実施して万全の記録保存に努めています。

このたび、簸川郡斐川町で簸川南地区の広域農道が建設されることになり、当委員会では昭和59年7月に荒神谷遺跡と西谷遺跡の試掘調査を実施いたしました。ところが、荒神谷遺跡から弥生時代の青銅製の剣が発見され、急遽、国庫補助事業として全面発掘することにいたしました。その結果、同一個所から358本もの銅剣が出土し、日本の原始古代史研究史上極めて重要な発見となりました。昭和59年1月の岡田山一号墳出土円頭大刀から「額田部臣」を含む銘文が発見されて間もないおり、出雲の古代史は日本中の各界の方々から注目をあびているところです。当委員会では今後、荒神谷遺跡の保存や銅剣の公開展示について積極的に対処していく所存でありますが、多くの方々に埋蔵文化財保護に対しての御理解を深めていただくために、取り急ぎ小冊子を発行することにいたしました。この小冊子がいささかでも資料として御活用いただければ幸いです。

なお、荒神谷遺跡の発掘調査等にあたり、多大の御協力、御指導を賜わりました文化庁、奈良国立文化財研究所、出雲農林事務所、斐川町をはじめ、関係各位に衷心より御礼申し上げます。

昭和60年3月

島根県教育委員会教育長

栗　栖　理　知

例　　言

1. 本書は、島根県教育委員会が国庫補助事業として昭和59年度に実施した島根県簸川郡斐川町大字神庭字西谷所在荒神谷遺跡の銅剣出土地の発掘調査概報である。
2. 調査組織は次のとおりである。

調査主体　島根県教育委員会

事務局　美多定秀（文化課長）、永瀬忠治（文化課課長補佐）、蓮岡法暲（同）、岩崎況一朗（文化課文化係長）、永塚太郎（同埋蔵文化財第一係長）、吉川広（同文化課主事）、陶山彰（島根県教育文化財団嘱託）

調査員　石井悠（文化課文化財保護主事、埋蔵文化財第二係長）、宮沢明久（文化課文化財保護主事）、内田律雄（同主事）、浅沼政誌（同兼主事）、三宅博士（島根県教育文化財団学芸主事）、足立克己（同文化財主事）

調査補助員　山内和也（早稲田大学大学院生）、宮井善朗（九州大学学生）、原俊二（国学院大学学生）、里形和彦（岡山理科大学学生）、荒木利幸

調査指導　山本清（島根県文化財保護審議会委員）、池田満雄（同）、町田章（同）、田中義昭（島根大学法文学部教授）、近藤喬一（山口大学文学部教授）、河原純之（文化庁文化財保護部記念物課）、佐原真（奈良国立文化財研究所）、沢田正昭（同）、秋山隆保（同）、伊東太作（同）、上原真人（同）、岩永省三（同）、伊藤晴明（島根大学理学部教授）、時枝克安（同助教授）

調査協力　出雲農林事務所、斐川町、斐川町教育委員会、西谷自治会、県立八雲立つ風土記の丘

3. 発掘調査に際しては、土地所有者木村吉正氏から多大の御協力をいただいたほか、村上正義、村上シゲリ、飯塚恵の各氏をはじめ地元の方々にも多大な協力を得た。
4. 銅剣の写真測量については奈良国立文化財研究所伊東、上原氏に依頼しておこなった。考古地磁気測定は島根大学理学部伊藤、時枝氏に依頼した。また銅剣出土状態の写真撮影は井上松影堂に依頼した。
5. 発掘調査の経過は山陰ビデオクラフト社に依頼して、ビデオフイルムに収録した。
6. 挿図中の方位は磁北を指す。
7. 挿図の浄写は足立克己と角明美、堀江五十鈴がこれを行った。
8. 本書の編集は前記調査指導者の助言を得ながら、石井悠、宮沢明久、内田律雄、三宅博士、浅沼政誌と協議して足立克己があたった。

目　　次

第１章　遺跡の位置と環境…… 1
第２章　調査に至る経緯と経過…… 2
第３章　調査の概要
　　1．遺構…… 4
　　2．埋納状況と土層…… 4
　　3．銅剣の埋納方法…… 7
　　4．銅剣…… 8
　　5．銅剣の取り上げ……11
　　6．考古地磁気測定……11
第４章　まとめ……13

挿図・付表目次

第１図　荒神谷遺跡の位置と周辺の遺跡…… 3
第２図　Ａ列出土状態と実測図…… 5
第３図　ステレオカメラによる写真測量
　　と現地説明会風景……10
第４図　銅剣取り上げ作業……11
第５図　焼土と試料採取風景……12

第１表　銅剣の計測位置と計測値…… 8
第２表　島根県内の弥生時代青銅器一覧……17
第３表　中細銅剣出土地名表……18

図版目次

図版１　地形測量図
図版２　銅剣埋納遺構実測図
図版３　銅剣出土状態実測図
図版４　埋納遺構土層実測図
図版５　銅剣略測図（１）
図版６　銅剣略測図（２）
図版７　荒神谷遺跡遠景・全景
図版８　銅剣出土地全景
図版９　銅剣発見時の状況と土層
図版10　銅剣出土状況
図版11　銅剣取り上げ後の状況
図版12　埋納遺構全景
図版13　銅剣（１）
図版14　銅剣（２）
図版15　銅剣（３）

第1章　遺跡の位置と環境

荒神谷遺跡は、島根県東部、宍道湖の西岸に位置する簸川郡斐川町の大字神庭字西谷812番地外に所在し、斐川町役場から南に約 1.5kmはいったところである（第1図）。そこは低丘陵に挟まれた小さな谷の最深部にあたっており、遺跡は谷水田から丘陵斜面まで約 150 m四方にわたっていると考えられる（図版1・上）。銅剣出土地は荒神谷遺跡の中でもさらに谷奥の、字西谷1710－18番地の山地で通称「畑ノ奥」と呼ばれる谷の一部である。

遺跡の周辺は、簸川平野と斐伊川に挟まれた、標高 300m以上の高瀬山・仏経山の北の裾野にあたっており、付近一帯は低い尾根が何本も北に細長く伸びて低丘陵地帯を形成している。『出雲国風土記』の出雲郡健部郷に比定されており、奈良時代以前には西谷の丘陵先端付近まで宍道湖が広がっていたようである。

斐川町内では現在までのところ、縄文時代から弥生時代にかけての土器を伴う遺跡は発見されておらず、平野丘陵、上学頭永徳寺周辺、三絡波知神社付近、羽根地区等で少量の石器類が発見されているのみである[1]。古墳時代前期の遺跡も発見されておらず、確認できているのは丘陵尾根上やその先端部に築造された古墳時代中期以降の古墳群である。その密度の高い地域は、仏経山西裾の出西一帯と高瀬山北裾の学頭の一帯で、学頭に近い荒神谷遺跡の周辺には、中期の神庭岩船山古墳や小丸子山古墳、そのやや東方には軍原古墳等がある。神庭岩船山古墳は舟形石棺を内部主体とする全長57～58m の前方後円墳で、発掘年代が古く、出土品の所伝を失い、また舟形石棺の身も失われている[2]。小丸子山古墳は直径35m、高さ5mの円墳で、主体部は小石を敷きつめた礫床である[3]。軍原古墳は前二者とほぼ同時期の古墳で、国鉄山陰本線建設の際に削へいされているが前方後円墳と考えられている。主体部の長持形石棺から玉や櫛、貝輪等が出土している[4]。そのほかに、古墳時代中～後期の上学頭古墳群のほか、古墳時代後期から奈良時代にかけての遺物散布地等が知られているが詳細は明らかでない。

ところで斐川町西端の斐伊川には、昭和37年国鉄山陰本線の鉄橋付け替え工事中に弥生時代後期から古墳時代前期の土器を多量に出土した斐伊川鉄橋遺跡があり[5]、さらにその西方の出雲平野には、大社町原山遺跡や出雲市矢野貝塚、多聞院遺跡、天神遺跡等、弥生時代から古墳時代前半にかけての大遺跡が散在している[6]。また斐伊川沿岸にはいわゆる四隅突出型墳丘墓6基や前方後方墳を含む弥生時代終末期～古墳時代前期の西谷丘陵遺跡[7]があり、さらにその上流には景初三年銘三角縁神獣鏡を出土した神原神社古墳[8]等がある。なお荒神谷遺跡西方の仏経山は『出雲国風土記』にみえる出雲郷の神名火山に比定されており、

その裾野の武部は、同風土記健部郷の起源説話にみえる、倭健命の名代として設置された健部の名残と考えられている。

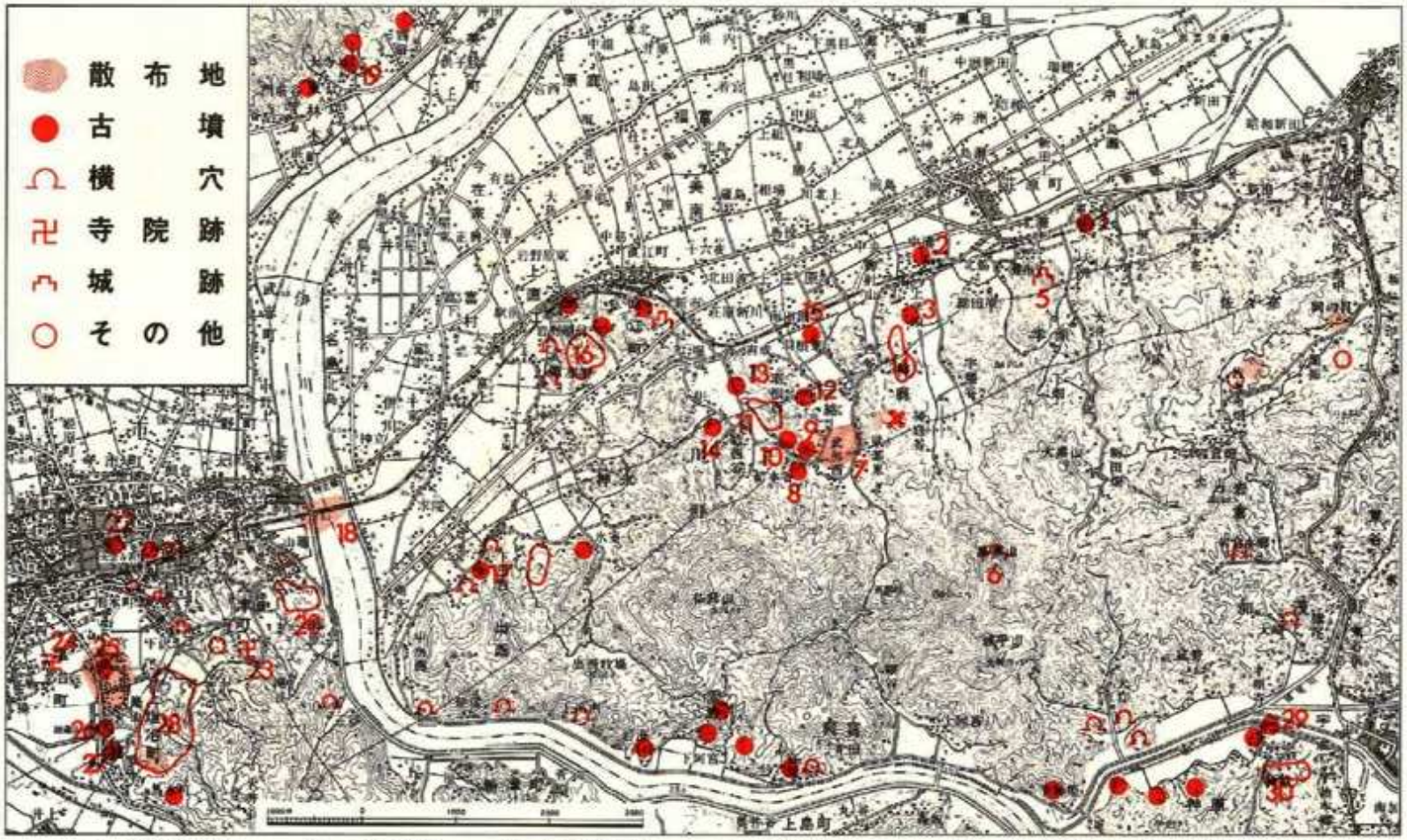
以上のような歴史的環境の中に荒神谷遺跡は立地しており、遺跡の周辺には、弥生時代以降、出雲の原始古代勢力の中心地が存在していたと考えられる。

第2章　調査に至る経緯と経過

荒神谷遺跡のある場所は、出雲農林事務所が計画した簸川南地区広域営農団地農道整備事業としての広域農道建設予定地にあたっており、昭和58年4月、同所から依頼を受けて島根県教育委員会と斐川町教育委員会が予定地内の踏査を実施した際、谷水田から須恵器片が採集されたことから遺跡の存在が確認されたものである。その後昭和59年に至って、斐川町内の農道建設予定地について改めて県教委あてに発掘調査の依頼があり、両者で協議を重ねた結果、昭和59年度実施分として荒神谷遺跡の試掘調査が決定したのである。

試掘調査期間は約2週間とし、諸準備を終えて現地調査にはいったのは昭和59年7月11日である。周囲の地形を考慮し、踏査の際の遺物採集地点が農道建設予定地内での遺跡の最重要個所と考え、遺跡の範囲を確認するため、遺物採集地点から東に向って予定地内の約 200m 間に計20ケ所の試掘溝を設定した。試掘溝は水田部では3m四方、丘陵斜面では幅 1.5m 、長さ3～10m の大きさに設定した。その結果、西谷に直接面した斜面およびその下の水田で、古墳時代後期～奈良時代の遺物包含層と掘立柱建物跡と考えられる遺構を検出した。さらに丘陵部では点々と須恵器や土師器が出土し、同地区にも何らかの遺構が存在することが予想された。試掘調査は以上のような成果を得て7月21日までに終了した。

銅剣を発見したのは7月12日である。第8試掘溝としたところの、地表下約50cmあたりに数本が重なった状態で発見された。現場で埋納壙の規模と本数を確認する作業を続ける一方、県教委では試掘調査から国庫補助を受けた県教委事業へ切りかえることにした。数日後、埋納壙の規模と銅剣本数か 200～ 300口に達することが判明したため、調査区の拡張範囲を11m四方に設定し、銅剣を一端埋め戻して全面発掘に踏み切った。銅剣検出後は銅剣の写真測量を奈良国立文化財研究所伊東太作、上原真人両氏に依頼し、銅剣取り上げには同研究所沢田正昭、秋山隆保両氏の指導を受けた。銅剣取り上げが終了し、最終的に銅剣総数が 358口と判明したのは8月30日である。以後埋納壙下半の確認調査を行い、9月12日すべての調査を終了した。なお、銅剣検出から取り上げまでほぼ全期間にわたって奈良国立文化財研究所岩永省三氏の指導を受けた。また調査中に検出した焼土の考古地磁気測定を島根大学理学部伊藤晴明、時枝克安両氏に依頼した。



× 荒神谷遺跡
1. 軍原古墳
2. 神庭岩船山古墳
3. 小丸子山古墳
4. 上学頭古墳群
5. 大井城跡
6. 高瀬城跡
7. 武部遺跡
8. 武部西古墳
9. 古殿古墳群
10. 石橋古墳群
11. 結　遺跡
12. 西光院裏山古墳
13. 貴船古墳
14. 結城古墳
15. 白塚古墳
16. 平野遺跡
17. 出西丸子古墳
18. 斐伊川鉄橋遺跡
19. 大寺古墳
20. 西谷丘陵遺跡
21. 大念寺古墳
22. 宝塚古墳
23. 長者原廃寺
24. 神門寺廃寺
25. 上塩冶築山古墳
26. 地蔵山古墳
27. 半分古墳
28. 上塩冶横穴群
29. 神原神社古墳
30. 神原正面北遺跡

第1図　荒神谷遺跡の位置と周辺の遺跡

第3章　調査の概要

1.　遺構（図版2）

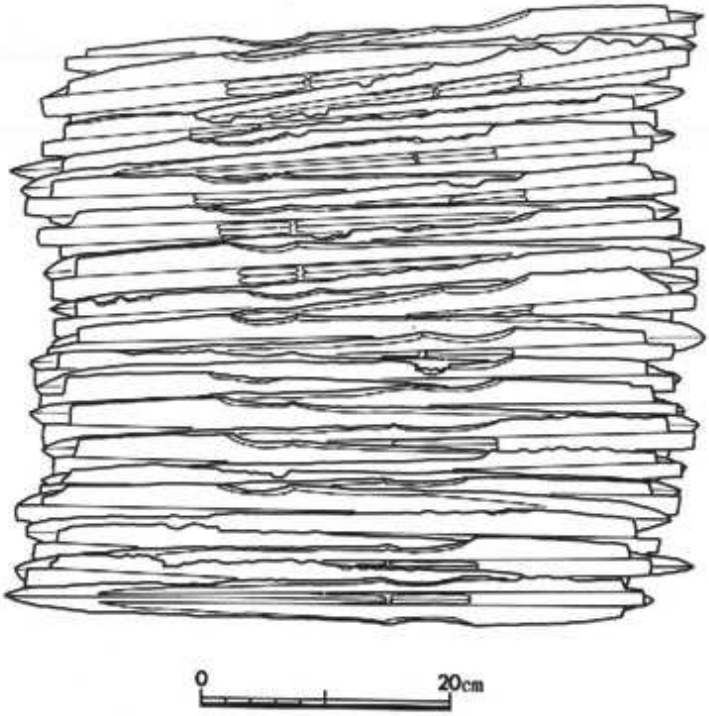
銅剣が埋納されていたのは標高28m余りの小さな尾根の南斜面中腹である。調査前の表面観察では大石等の標識となるものは全くなく、かすかに斜面に凹地ができていたのみである（図版1）。遺構は傾斜角35°前後の急斜面に位置しており、上下二段のテラス状加工段と銅剣埋納壙、柱穴がある。上の加工段は地山面をやや垂直に近くカットして平坦面を作り、テラス状にしたもので、長さ約 6.9m、幅 1.2～ 1.6m、平坦面の長さ6m、幅 0.6～ 1.2m、壁の高さ約1mである。平坦面中程には壁面に沿って三個の柱穴が確認された。ほぼ一直線に並んでおり、柱穴の間隔はそれぞれ 1.5m である。各柱穴は掘方円形で、直径20～25cm、深さ15～20cmといずれも小形で浅い。柱穴中央には径10cmを測る柱痕跡が認められ、その中には暗褐色土が堆積していた。柱の裏込めには、破砕した白色の地山風化礫の突き堅められた状態が観察された。

下の加工段は銅剣を埋納するために設けられたものである。上の加工段の先端付近から浅い擂鉢状に掘り込まれており、東西長 4.6m、南北幅 2.8m、上の加工段の先端からの深さは約1mを測る。底面近くにはややいびつな隅丸長方形の銅剣埋納壙を設けている。埋納壙は現状で東西の長さ約 2.6m、幅約 1.5m、奥壁際で深さ約40cmを測るが、斜面の下側にあたる部分ではほとんど掘り込みが認められないところがあり、その部分は遺構表面が多少地崩れを起こして流出したものと考えられる。埋納壙底面はほぼ平坦で、中央やや西寄りに長さ約1m、幅約 0.3～0.4 m、深さ約 0.4m の長楕円形の小土壙が検出された。内部には埋土しかはいっておらず、用途は不明である。

2.　埋納状況と土層

銅剣は、埋納壙底面から約10cm上のところに四列に並べられていた。各列は南北方向に長く向いており、銅剣は東西方向に、鋒と茎がほぼ水平になるようにして刃を立てた状態で出土した。銅剣の各列は、西から順にA．B．C．D列と呼称することとし、各々の本数はA列34口、B列 111口、C列 120口、D列93口であった。A列は鋒の方向を1口ずつ変えて交互に置き、B列は南端4口が鋒を西に向けていたほかはA列同様交互であった。C．D列はすべて鋒を東に向けた状態で置かれていた。各列とも整然と並べられており、列と列との間には若干の空間部分も認められたが、北側部分では、隣り合う列同志で両端が重なっているところもあった。したがって、銅剣列同志を仕切るものはなかったと考え

られる。A列以外の各列にはその並び方に、中央部分で東西方向に若干のずれが認められ、その原因をいくつか考えることができるが、今は速断することができない。また、各列の南端部で、埋納壙底面の地崩れのため、数本ずつ斜面下方へずり落ちかけた形跡が観察された(図版2)。



第2図　A列出土状態（上）と実測図（下）

埋納壙底面と銅剣との間には、地山の風化礫まじりの淡褐色粘土層があり、特に長楕円形の小土壙部分に限り、淡褐色粘土の上にさらに灰色および黄白色粘土が検出された。また、銅剣直下の土は銅イオンの流出で緑色を呈していた。

銅剣の直上には厚さ 0.5cm 程度の黒褐色有機質土があり、銅剣の下半（銅剣は刃を起こして、茎と鋒をほぼ水平にして置かれているので、その状態で脊よりも下半ということ）や銅剣以外のところでは、同じ土は観察されなかった。銅剣列の間の空間部分では多少落ち凹んではいるが、同層がつながっているのが観察された。このことから、銅剣は、たとえば布のようなもので覆われていたものと考えられるが、その際、銅剣全体を一度に覆ったものかどうかは今のところ判断できない。

上段テラス部分から下段埋納壙にかけての土層は、基本的には大きく次の6層に分けることができる(図版3)。

すなわち、上から順に、

Ⅰ　黒色腐植土とその下の淡褐色土層（表土層）

Ⅱ　暗褐色土層（遺物包含層）とそれに続く層

Ⅲ　上段テラス部分への堆積層

Ⅳ　下の加工段から上段テラスにかけての埋土の上面に堆積した暗褐色土等

Ⅴ　下の加工段から上段テラスにかけての埋土

Ⅵ　銅剣下の淡褐色土

である。Ⅱの遺物包含層からは須恵器甕片と土師器甕片が少量出土した。その年代は古墳時代後期から奈良時代と思われるが、小破片のため細かな年代を限定できない。このⅡ層は調査区上方にさらに伸びている。なお、下の加工段の北端付近に、この層の上面から掘込まれた土壙を検出した。土壙は、直径約1m、深さ約 0.5m の半球状を呈しており、北側はほぼ垂直に掘り込まれている。土壙内には暗褐色土が堆積し、底面には焼土層が検出された。Ⅲ層は淡褐色土と暗褐色土がほぼ交互に堆積しており、下層ほど粘性が強くなる。遺物は含まれていない。Ⅳ層の暗褐色土は上段テラス部分では、炭化物が混じって濁っており、この層の表面に赤色焼土が確認された。焼土はテラスの壁面に沿って幅30～50cm、長さ約4mにわたって検出された。また、炭化物塊もこれに重なるようにして確認された。なお、テラス壁面には焼けた形跡は残っておらず、また焼土もⅣ層下面、すなわちテラス上面までは達していなかった。

銅剣埋納にかかわるものはⅤ層とⅥ層である。これらは地山の粘土に色・質ともに酷似しており、Ⅰ～Ⅳ層とは明確に区別できるもので、銅剣埋納時に埋め戻された土と判断される。このうち、Ⅴ層はさらに3層に分けることができる。銅剣直上には、地山が風化して柔くなった礫（直径3cm程度まで）を多量に含む黄白色粘土層があり、その上に礫を含まない黄白色粘質土、さらに同質の黄褐色粘質土がかぶっている（南北ベルト東壁）。ただし、西壁では黄褐色粘質土が黄白色粘質土の下にはいり込んでおり、この状況は両層が同時に埋め戻されていったことを示すものと思われる。黄褐色粘質土の上辺は、さらに上段テラスの平坦面まで達していた。Ⅵ層の淡褐色粘土は前述したように銅剣の下に敷いた土である。

なお、Ⅴ層上面で、銅剣列の東西両側に相当する位置に、各々数個の柱穴状のピットが検出された。西側2個はどちらも下部が地山まで掘り込まれていたが、東側4個は埋土内に留まっていた。これらには柱穴と単なるピットがあるようで、目下弁別中である。

3. 銅剣の埋納方法

以上のような遺構の検出状況および土層堆積状況から、遺構について次のことが考えられる。すなわち、下段の埋土である黄褐色粘質土の上辺が、上段テラスの平坦面まで達していることから、上段テラスは下段を埋める段階にはすでに作り出されていたと考えられ、また、下の加工段を作る以前に削り出されていたという確証が得られないところから、上下両加工段はほぼ時を同じくして作り出されたものと考えるのが妥当のようである。この場合、黄褐色粘質土の上辺が上段テラス壁際まで達していないという事実は、銅剣埋納後も、上段だけは土を埋め戻すことをしなかったものと思われる。

以上のような見解に立って、銅剣の埋納方法を考えた場合、次の①～⑤のような手順をとっていることが考えられる。すなわち、

①まず、斜面に上下二段に加工段を作り出す

②下の加工段中央に、ややいびつな隅丸長方形の埋納壙を設ける

③埋納壙底面に淡褐色粘土を敷き、平坦に整える。

④埋納壙奥壁から銅剣を並べ、有機物で上を覆う

⑤銅剣直上に、地山の風化して柔かくなった礫を多量に含む黄白色粘土をかぶせ、その上に礫を含まない黄白色粘質土、さらに黄褐色粘質土を盛って、下の加工段のみを旧地形に近い状態に埋め戻す

という手順である。④の銅剣の並べ方、有機物の覆い方については前述したように、現在検討中で、ここでは大きな手順の流れとして上記の表現をしておく。

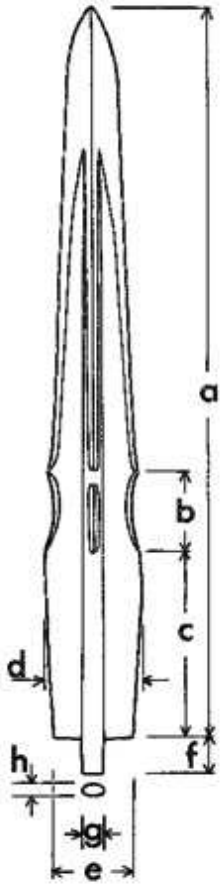
なお、埋納壙底面を淡褐色粘土で整える際、その中央の長楕円形の小土壙部分には、淡褐色粘土の上にさらに灰色および黄白色の粘質土を載せているが、これが意図的になされたのかどうか、今後も検討が必要である。

上段テラスの平坦面に検出された柱穴は、上段テラスに付属するものと考えられる。下段の埋土上面で確認された柱穴状のピットとの関係を現在検討中であるが、銅剣埋納時に掘り込まれたものであれば、埋納遺構部に覆屋のごときものの存在も考慮しなければならないであろう。

Ⅳ層とその上面の焼土層は、前述した土層観察の結果から、銅剣埋納後ある一定の期間を経てから、テラス部分を何らかの目的に使用した結果と考えられ、銅剣埋納とは無関係であると判断された。また下の加工段上方の円形土壙は、須恵器、土師器を含む遺物包含層（Ⅱ層）の上面から掘り込まれており、その所属時期は上段テラス部分の焼土層よりもさらに新しいことが判明した。

4. 銅剣（図版5・6）

銅剣の番号は、取り上げや後の整理を考慮して、A～D列の各列ごとに南端から1号・2号・3号……と番号を付けた。検出された銅剣は詳細な観察を経ていないため、すべてについては詳述しえないが、いくつかを紹介しておく。なお、銅剣は片面にガーゼを貼付けて取り上げており、観察しうる面はいずれも埋納壙奥壁側（北側）である。



B－7号銅剣　全長52.6cm、剣身の最大幅約6.2 cmである。茎は長さ 2.3cm、幅 1.6cmで断面楕円形を呈する。錆が著しくよく見えないが、茎部分には鋳造後タガネ状工具とみられるもので刻んだ「×」印が認められる。鋒部は幅広で、鋒側⅓の脊と刃との間が匙面状に丸く凹んでいる。刳方から下は脊の左右で幅が著しく異っている。

B－8号銅剣　全長51.1cmで最大幅は 6.3cmである。刳方はやや深めで刳方から下はゆるやかに湾曲して関に至る。鋒部はやや幅狭である。

B－9号銅剣　全長50.5cmである。最大幅 6.3cmで、刳方下端が関から14.1cmのところにあって位置が高い。茎長、

第1表　銅剣の計測位置（右上図）と計測値

（単位cm，カッコは現存長）

銅剣番号	全長 (a+f)	剣身長 (a)	刳方長 (b)	刳方下端～関長 (c)	剣身最大幅 (d)	関幅 (e)	茎長 (f)	茎幅 (g)	茎厚 (h)
B－7号	52.6	50.3	5.6	12.5	(6.1)	5.3	2.3	1.6	0.9
B－8号	51.1	48.9	4.7	12.1	6.3	4.9	2.2	1.6	1.1
B－9号	50.5	48.8	5.2	14.1	6.3	(4.4)	1.7	1.7	1.0
C－2号	51.2	49.2	5.6	11.0	(5.8)	(3.5)	2.0	1.7	0.9
C－3号	(50.2)	(48.4)	5.0	13.2	(6.3)	5.3	1.8	1.5	0.7
C－51号	51.7	49.9	6.6	11.2	6.6	5.2	1.8	1.6	0.9
C－52号	52.5	50.4	5.8	13.1	6.5	5.2	2.1	1.8	0.9
C－53号	52.6	50.4	5.8	12.7	6.6	5.4	2.2	1.7	0.9

茎幅ともに 1.7cmで厚さ 1.0cmを測る。鋒部は幅広である。

C－2号銅剣　全長51.2cm、刳方長 5.6cm、推定最大幅は 6.5cmである。この銅剣はC列の南端にあって地表面に近く、堆積土や地すべりの影響を受けたようで、刃部下半（図の左側）が検出時、すでに欠失していた。茎長 2.0cm、茎幅 1.7cmで断面は楕円形に近いが両端に甲張りの痕跡が残って尖っている。茎部分に溝幅1mm弱、長さ1cm程度の「×」印がある。鋒部は幅狭である。なお、当銅剣およびC－3号のみ観察面は南側である。

C－3号銅剣　当銅剣も発見当初からみえていたものの、C－2号に比べて良質で欠損が少ない。全長50.2cm、最大幅は 6.3cmである。刳方より下方が図の右側は直線的になる。右関部の5mm程度の凹みは鋳造時にできたものであろうか。茎長 1.8cm、茎幅 1.5cmで茎断面はやや卵形を呈する。刳方から下の脊には、かすかな稜線が認められる。鋒部は幅狭である。

C－51号銅剣　全長51.7cm、最大幅約 6.6cmで、茎長 1.8cm、茎幅 1.6cmである。鋒部は幅広で脊先端部の両側はわずかながら匙面状に凹んでいる。刳方から下の両側縁は甲張落としが充分でなく、◀のように内湾した面がそのまま残っている。白色がかった緑青のふき出しが著しく、以下C－52、53号銅剣も同様である。

C－52号銅剣　全長52.5cm、最大幅は 6.5cmである。鋒部幅広で刃部の研ぎ出し幅が広い。茎は端部側にやや裾広がりで茎長 2.1cm、茎幅 1.8cmである。茎断面はきれいなレンズ状を呈する。また茎右端にやや偏って「×」の刻印が認められる。

C－53号銅剣　全長52.6cm、最大幅 6.6cmである。C－51号銅剣と同様に脊の先端両側が匙面状にわずかに凹んでおり、刳方から下の両側縁には甲張りの痕跡が残っている。茎長は 2.2cm、幅 1.7cmである。茎の断面はレンズ状を呈する。

以上のごとく、銅剣の特徴はほぼ同一でまとめるとおおむね次のとおりである。まず色調は土の付いたところは深緑色を呈し、空気に接していた部分（銅剣の間隙で土の流入がなかったところ）は藍色を呈している。銅剣はいずれも全長50～53cmで若干これを前後するものも認められる。刳方の位置や長さは一定でなく、刳方下端（茎側）が突出せず、ゆるやかに葉部に移行するものが多い。刳方下の剣身最大幅は6～ 6.7cm程度である。脊や茎は扁平で断面楕円形ないしレンズ状を呈し、脊上の研ぎは刳方部までのようである。鋒部の幅、刃部および刳方部の研ぎ出し方と突起部の形態、刳方から関部までの形態、茎の長さ、幅等は様々である。脊部先端（鋒側）の両側が匙面状に凹んでいるものがあり、また刳方下の葉部両端は甲張りを研ぎ落とすが、中にはその痕跡が残るものもある。

銅剣の型式分類や編年については、岡崎敬[09]、三木文雄[10]、森貞次郎[11]、近藤喬一[12]、岩永省三[13]

ら各氏のすぐれた論考がある。いま岩永氏の分類に従うと、以上の諸特徴から荒神谷遺跡の銅剣は今のところすべて中細銅剣C類の範疇にはいると思われる。また、今回の銅剣の中にはB－7号、C－51号銅剣のように匙面状の樋をもち、中広銅剣に先行する特徴を持つものがある。中細銅剣と中広銅剣の系統関係を考える上で注目に値する。なお、これらと同型式の鎔笵は今のところ発見されていない。

銅剣の茎部分には片面に鋳造後、タガネ状工具によるとみられる「×」印の存在するものが認められた。この「×」印の刻まれた銅剣の数は、現在A列8口、B列7口、C列24口、D列6口の計45口を確認しているが、今後錆や土を除去して詳細に観ていけば、その数はさらに増加するものと思われる。なお、他の中細銅剣に同様の刻印の発見された例はない。

これらの銅剣は検出時の観察では、粘土中にあってかなり脆弱な状態ではあったが、基本的にはいずれも刃こぼれ等の損傷は認められなかった。銅剣の型式が単一な点を考慮すると、鋳造後比較的短期間のうちに埋納されたと判断するのが妥当ではなかろうか。

第3図　ステレオカメラによる写真測量（上）と現地説明会風景（下）

5. 銅剣の取り上げ

銅剣は前述したように粘土内にあって脆弱になっていたため、取り上げに際しては、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室沢田正昭、秋山隆保氏の指導を得てアクリル樹脂による表面強化を行って、一本ずつ取り上げる方法を採った。その手順は、次の6段階である。

①まず銅剣表面の土を除去

②この状態で写真撮影および平面実測図の補足

③次に銅剣表面にアクリル樹脂5％溶液（溶剤はトルエン）を塗布（その際ガーゼで補強）

④乾燥（ドライヤーで強制乾燥）

⑤添木をあてて剝ぎ取るように取り上げ

⑥取り上げ後の写真撮影

この作業を1本ずつ繰り返し行った訳であるが、銅剣が密着した状態で置かれているため、銅剣の脊部分が錆で結合している場合が多く、2本以上まとめて取り上げることもあった。また各列とも、中央部分では白色がかった緑青のふき出しが顕著で、3～4本が銹着している場合には、まとめて取り上げざるをえなかった。

③

④

⑤

第4図 銅剣取り上げ作業
（右下の番号は本文中の作業工程を示す）

6. 考古地磁気測定

前述したように銅剣埋納とは直接関係ない、調査区内の2ケ所で焼土層が確認された。この焼土層と下の加工段の埋土である黄白色粘質土の3ケ所について、島根大学理学部伊藤晴明、時枝克安氏に熱残留磁気による年代測定を依頼した。下段埋土の黄白色粘質土は、別に火を受けて熱せられた痕跡や焼土があったわけではなく、水分を含んだ粘土に何らか

(1)

(2)東

(2)西

第5図　焼土(上・中)と試料採取風景(下)
(右下の番号は本文中の試料番号に同じ)

の方法で強い圧力がかかれば、粘土内の帯磁性鉱物が磁気化するという物理化学的理論に基いて、考古学の分野に応用できないかという問題点に立って、試料採取と分析を試みられたものである。

なお、荒神谷遺跡の試掘調査の際、銅剣出土地の東隣りにあたる尾根の、東斜面に設定した第13試掘溝でも土壙が検出された。この土壙は、断面半円形を呈し、底面に厚さ約10cmの焼土層が存在する点で、銅剣出土地の下の加工段上方で検出された土壙と近似しており、両者の関係を推定するため、発掘調査終了後に、新たに試料採取を行った。

まだ正式な結果は出ていないが、採取試料と測定年代の概要は次のとおりである。

(1)下の加工段上方の円形土壙内焼土――
――A.D. 950±100年

(2)上段テラスⅣ層上面の焼土（東側）
(3)　　〃　　（西側）
――A.D. 590±30年

(4)第13試掘溝土壙内焼土――
――A.D. 950±100年

(5)下の加工段埋土（黄白色粘質土）――
――磁気化はしているが年代不明

時枝氏によれば、（5）の黄白色粘質土の試料は磁気化はしているが、焼土でないために残留磁気の磁化機構の研究が進んでおらず、その方向が粘土をかぶせた当時の地磁気の方向を示しているとは、現地点では結論しにくいとのことである。しかし、その磁化機構が解明され、地磁気の方向性が示されるようになれば、考古資料への応用範囲が大きく広がるわけで、今後の研究が期待されるものである。

第4章　ま　と　め

これまでに島根・鳥取両県で発見された青銅利器は、島根県の銅剣10口、銅戈1口、鳥取県の銅剣5口の計16口[14]であり、今回の大量銅剣発掘は、従来の銅剣分布図を全く塗り変える出来事となった。最近の青銅器研究事情は、福岡県大谷遺跡や岡本四丁目で小銅鐸鎔笵が、福岡県赤穂ノ浦遺跡や佐賀県安永田遺跡で横帯文銅鐸鎔笵がそれぞれ出土[15]し、九州でも銅鐸を鋳造していたことが判明したし、自然科学面から鉛同位体の分析による原料産地の研究が進[16]むなど、青銅器研究の新時代を迎えた感がある。このような時期に、青銅器の出土総数は少ないながらも、中細銅剣C類や古式銅鐸が多いことで注目されていた出雲地方で、大量銅剣が出土した意味は大きい。荒神谷遺跡の銅剣発掘調査は、試掘調査中の偶然の発見であったが、直ちに全面調査に切り換えたため、銅剣の埋納状態について綿密な観察、調査が可能となったものである。銅剣の出土総数をも含めて、弥生時代研究史上極めて稀な調査例であり、今後の青銅器研究の貴重な資料になるであろう。ここでは以下に埋納遺構と埋納状況についてその成果を整理しておきたい。

まず銅剣の埋納場所としては、荒神谷遺跡の場合、細長い谷の最深部、標高28m余りの小丘陵斜面に位置している。他の埋納例の場合、それは銅戈・銅矛・銅鐸にも言えることであるが、山の斜面、台地あるいは平地と、その埋納場所はさまざまである。兵庫県西淡町古津跡遺跡のように海岸近くの平地に埋納された例[17]もあるが、その多くは山の斜面から発見されている。銅鐸等の埋納場所も含めてみたとき、その場所でも山の頂上近くであったり、裾部であったりする。前者の場合、滋賀県野洲市小篠原の銅鐸出土地[18]などのように平野を見降ろせるような眺望のきく場所もあるが、神戸市桜ケ丘[19]などのように平野からは裏側にあたる斜面であることも多い。後者の場合でも、最近の発見例の兵庫県氷上郡野々間遺跡（銅鐸）[20]、や佐賀県三養基郡検見谷の銅矛埋納地[21]のように平野からは直接見えない場所とか、あるいは狭い谷の谷頭付近などが選定されている。しかし、いずれの場合であってもこれらの状況は、青銅器の埋納場所として、一般的に、集落からやや離れたところが選定されたことを示していると思われ、荒神谷遺跡もその例外ではないといえる。ただし、他の埋納地の例と若干異なるところがあるとすれば、それは銅剣を埋納した谷が極めて小さいこと、そしてほとんど周囲の展望がきかないということであろうか。青銅器の埋納例と埋納場所を整理・検討して、今後その類例等を明らかにしていく必要がある。

次に、今回の調査成果の大きな特徴として、二段に作り出された埋納遺構と大量の銅剣をあげることができる。銅剣の埋納壙については、島根県鹿島町志谷奥遺跡[22]で明らかにさ

れているが、その他ではほとんどわかっていない。（大）石に伴う例として、広島県尾道市大峰山[23]、同安芸町木の宗山[24]、島根県大社町命主神社境内等[25]で大石の間あるいは下から発見された例があり、また香川県観音寺市藤ノ谷[26]、兵庫県佐用郡平松等[27]では石積の下から発見されたと伝えられているが、埋納壙のことまでは明らかになっていないのが実情である。その他に埋納壙のわかるものとして銅鐸の場合がある。神戸市桜ケ丘、京都府相楽郡相楽山[28]、兵庫県野々間遺跡、大阪府羽曳野市西浦等[29]がそれであるが、このうち前三例は銅鐸の数量よりも大きな埋納壙で、しかも底面も平坦に近かったようで、西浦例は平地に土壙状の埋納壙を設けたと考えられている。銅矛や銅戈の場合でも、たとえば大分県臼杵市坊主山[30]や佐賀県検見谷の銅矛のように、複数の銅矛・銅戈が並んで出土している様子は、ある程度埋納壙も平坦に作り出されていたことを予想しうるものである。しかし、以上のように平坦な埋納壙を設ける例はあっても、二段に埋納施設を作り出した例は今のところなさそうである。また、荒神谷遺跡の場合でも銅剣の埋納壙自体はその量に合わせて小さいものであったが、埋納施設としてはかなり大形の段を作り出していることになり、その意味で、青銅器の量で埋納遺構の大きさが決定されるとは一概に言い切れないようである。そして、このことは先の相楽山あるいは野々間遺跡の出土状況からも言えることである。

銅剣の複数埋納としては、中細銅剣で今までに７例、平形銅剣で19例を数える[31]が、１ケ所の埋納量としては兵庫県古津路の13口が最高である。また銅矛・銅戈の場合でも、福岡県春日市の銅戈48口[32]、同市小倉の銅矛27口が最高で、荒神谷遺跡の銅剣が１遺跡での埋納量としてはいかに多いかがよくわかる。このことは、これまでの１遺跡の埋納量の認識を完全に打ち裂るもので、やや特殊な感は否めない。銅剣埋納の意味について特に限定して議論された例はないが、従来から銅鐸埋納と同様の解釈がなされており、それには地中保管説、祭祀説、廃棄または隠匿説等がある[33]。荒神谷遺跡例には前述したようにやや特殊な感があり、同型式の鋳笵が発見されていない現在、その製造地の問題等も絡んで、大量銅剣埋納の解釈が今後議論の対象になるであろう。

銅剣の並べ方についてみてみると、荒神谷遺跡では銅剣の刃を立てて鋒と茎をほぼ水平に近い状態で並べている。これは埋納壙の規模に対して銅剣をコンパクトに、なおかつ整然と並べる手段と考えられるが、同様の並べ方は岡山県倉敷市瑜珈山の５口等[34]、いくつかあるようである。ただし、Ａ・Ｂ列のように鋒と茎を交互にする例は、銅矛や銅戈に数例知られている[35]のみで、銅剣では明らかでない。なおＢ列の大半が鋒と茎を交互に差し違えて置かれている中で、同列の南端４口が、鋒を西に揃えている点が注目される。これをどのように考えるか、銅剣全体の配列とも関連して、今後問題となるところである。

銅剣の型式については前章でも記したように、岩永省三氏の中細銅剣C類にほぼ収まると思われるが、今後銅剣の詳細な観察によって 358口がどのように細分しえるのか、またこれまで他地域で発見された同型式銅剣をも含めてどれだけ笵を共有するものがあるのか、さらには成分分析によって原材料の同定やそこから生まれる工人集団の推定等、多岐にわたる問題が残されている。これらの点は今後の銅剣の整理・分析等で徐々に解明されていくことであり、その意味においては銅剣の研究はこれからだと言える。しかし、これらの課題が単に荒神谷遺跡の問題にとどまらず、我が国の弥生時代青銅器のかかえている未解決の問題に迫るものとなることは想像に難くない。

なお、将来以上のような研究を進めるにあたっては、まず当地方の弥生遺跡さらには弥生社会について整理、再検討という基礎作業が必要であろう。島根県内における弥生遺跡・弥生時代については、先学のすぐれた研究がいくつもあるが、近年の発掘調査によっても著しい成果があがっており、それらを加味して再構成する必要がある。特に出雲平野周辺では第1章で紹介した遺跡をはじめ、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が多数存在するが、いずれも小規模な発掘にとどまっており、遺跡の性格や規模等不明確な部分が多いのが実情である。充実した総合的かつ詳細な調査研究が待たれるところである。

註

(1) 『平野遺跡群発掘調査報告書Ⅰ』斐川町教育委員会 1983年

(2) 山本清「山陰の石棺について」(『山陰古墳文化の研究』所収) 1971年

(3) 前掲(2)に同じ

(4) 前掲(2)に同じ

(5) 出雲考古学研究会「斐伊川鉄橋遺跡」『古代の出雲を考える3・出雲平野の集落遺跡Ⅰ』 1983年

(6) 『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財報告』島根県教育委員会 1980年

(7) 出雲考古学研究会『古代の出雲を考える—西谷墳墓群—』 1980年

(8) 蓮岡法暲「島根県加茂町神原神社古墳出土の景初三年陳是作重列式神獣鏡」(『考古学雑誌』第58巻第3号) 1972年

(9) 岡崎敬「青銅器とその鋳型」『立岩遺跡』 1977年 ほか

(10) 三木文雄「仿製銅剣と銅鐸の鎔笵について」(『ミューゼアム』230) 1970年
三木文雄「銅剣の鋳型とその製品について」(『日本歴史』第376号) 1979年

(11) 森貞次郎「弥生時代における細形銅剣の流入について」『日本民族と南方文化』1968年
(12) 近藤喬一「平形銅剣と銅鐸の関係について」(『古代学』第17巻第3号) 1970年
近藤喬一「銅剣の変遷」 『古代史発掘』5 1974年
(13) 岩永省三「弥生時代青銅器型式分類編年再考」(『九州考古学』第55号) 1980年
(14) 『青銅の武器』九州歴史資料館 1980年
(15) 松本清張編『銅鐸と女王国の時代』日本放送出版協会 1983年
(16) 馬渕久夫・平尾良光「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」(『考古学雑誌』第68巻第1号) 1982年
(17) 武藤誠・三木文雄「三原郡西淡町古津路出土の銅剣(古津路銅剣)」(『桜ケ丘銅鐸・銅戈』兵庫県教育委員会) 1969年
(18) 梅原末治『銅鐸の研究』 1927年 ほか
(19) 『桜ケ丘銅鐸・銅戈』兵庫県教育委員会 1969年
(20) 発掘調査を担当した兵庫県教育委員会種定淳介氏のご教示による
(21) 西日本新聞昭和60年2月15日付記事等
(22) 『志谷奥遺跡』島根県鹿島町教育委員会 1976年
(23) 木下忠「尾道市大峰山出土銅鉾銅剣について」(『広島考古研究』2) 1960年
(24) 谷井済一「安芸国高宮郡福田発掘の銅鐸銅剣」(『考古学雑誌』第3巻第10号) 1913年
(25) 近藤正「島根県下の青銅器について」(『島根県文化財調査報告書』第二集、島根県教育委員会) 1966年
(26) 福家惣衛「香川県出土の銅剣」(『考古学雑誌』第37巻第4号) 1962年
『さぬきの遺跡』 1972年
(27) 島田貞彦「播磨国佐用郡平松発見の銅剣」(『人類学雑誌』第41巻第1号) 1925年
(28) 奥村清一郎・松本秀人「相楽山銅鐸出土地の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第6号、京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982年
(29) 『西浦銅鐸』羽曳野市教育委員会 1979年
(30) 賀川光夫「新たに発見された東九州の銅鉾銅戈」(『考古学雑誌』第39巻第2号) 1953年
(31) 型式および所在の不明なものを除く。(註14より)
(32) 西谷正「九州の銅戈」(『月刊文化財』1969年9月号)
(33) 佐原真「銅鐸の祭り」『古代史発掘』5 1974年
(34) 末永雅雄「備前瑜珈山出土の銅剣」(『考古学雑誌』第42巻第3号) 1957年
(35) 武末純一「埋納銅矛論」(『古文化談叢』第9集) 1982年 および前掲(32)
(36) 勝部昭「出雲・隠岐発見の青銅器」(『古文化談叢』第8集) 1981年
(37) 梅原末治「新出土の銅鐸の鋳型片其の他」『古代学研究』25 1960年
(38) 直良信夫「石見上府村の銅鐸発掘地」(『考古学雑誌』第22巻第2号) 1932年
(39) 『波来浜遺跡発掘調査報告書』島根県江津市 1973年

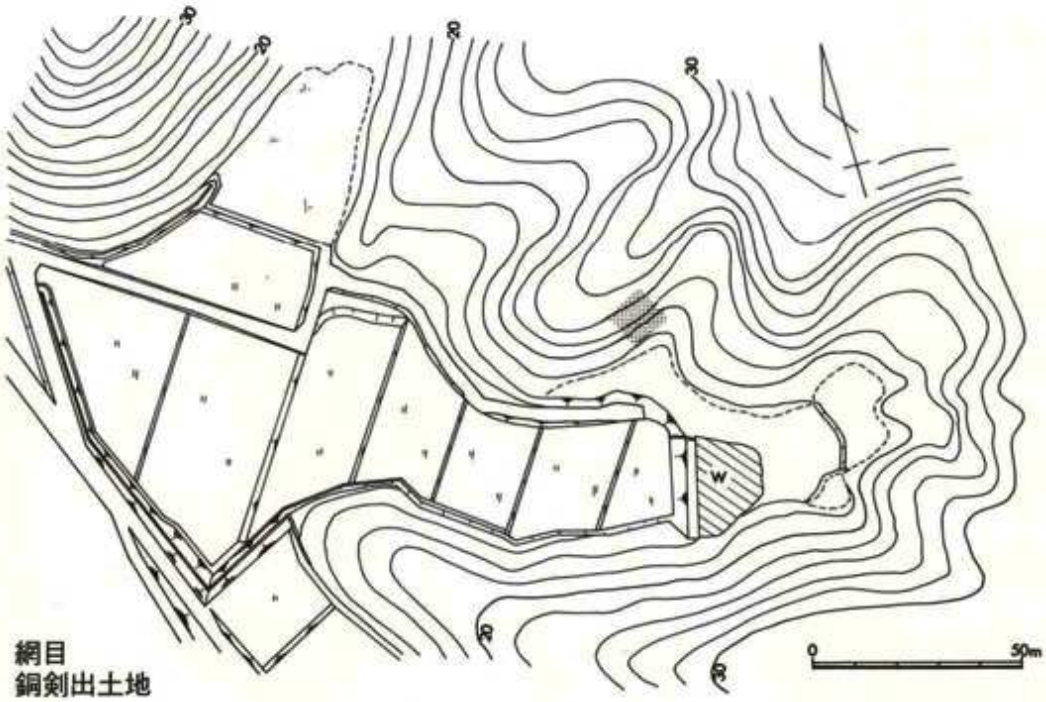
第2表　島根県内の弥生時代青銅器一覧(荒神谷遺跡を除く)

出土地	種類	型式	長さ 高さ (cm)	所蔵・保管	備考	文献 (註に同じ)
八束郡鹿島町志谷奥遺跡	剣	中細C	53.9	文化庁 (風土記の丘保管)		(22)
	〃	〃	50.8	〃		
	〃	〃	50.7	〃		
	〃	〃	50.5	〃		
	〃	〃	50.4	〃		
	〃	〃	49.3	〃		
	鐸	外縁付鈕Ⅰ式	現30.7	〃	4区袈裟襷文	
	〃	扁平鈕	〃20.8	〃	〃	
松江市竹矢町平浜八幡宮蔵品	剣	細形Ⅱb	〃26.5	平浜八幡宮 (風土記の丘保管)		(25)
仁多郡横田町横田八幡宮蔵品	〃	中細C	50.9	横田八幡宮 (風土記の丘保管)		〃
簸川郡大社町命主神社境内	戈	中細b	31.2	出雲大社	硬玉勾玉共伴	〃
(伝)簸川郡大社町出雲大社境内	矛	広形		長野県諏訪神社 (松本市日本民俗博物館出陳)		(36)
(伝)島根県	剣	細形Ⅱ	31.0	風土記の丘保管		
(伝)八束郡八雲村熊野	鐸	扁平鈕	20.5	熊野大社 (風土記の丘保管)		(36)
(伝)大原郡木次町	〃	外縁付鈕	20.6			(36)・(37)
(伝)出雲国	〃	外縁付鈕Ⅰ式	22.3	木幡家	邪視文	(25)
隠岐郡海士町竹田遺跡	剣	中細b	現32.0	隠岐島前教育委員会 (風土記の丘保管)	九重式土器を伴う溝	(36)
邑智郡石見町中野仮屋	鐸	扁平鈕	47.3	東京国立博物館	全面1区流水文	(18)
	〃	突線鈕Ⅰ式	42.5	〃	6区袈裟襷文	
浜田市上府町	〃	扁平鈕		〃	4区袈裟襷文	(38)
	〃	〃	26.5	〃	4区袈裟襷文	
江津市後地町波来浜遺跡	鏃		6.4	江津市教育委員会 (風土記の丘保管)	B区1号石囲い墓	(39)
	〃		4.9	〃	〃	
	〃		4.4	〃	B区2号石囲い墓第3主体	
	〃		4.0	〃	〃	
	〃		5.4	〃	B区2号石囲い墓第4主体	
	〃		6.4	〃		

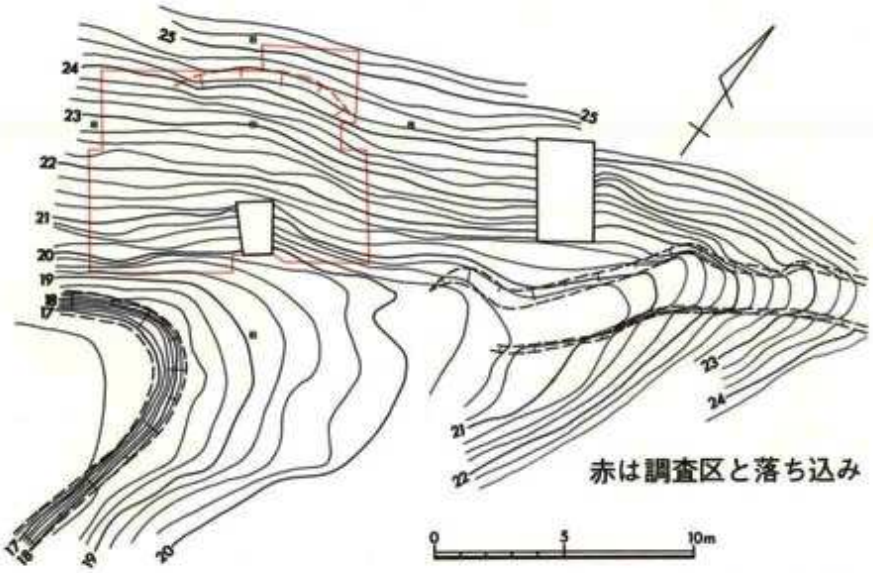
第3表　中細銅剣出土地名表（荒神谷遺跡を除く）

No.	出　土　地　名	型式	数	遺　構	備　　考
1	福岡県筑紫野市二日市峰	b	1	甕　棺	現在せず
2	〃　田川市糒上の原	a	1	箱式石棺	
3	大分県大分市浜283	b	4		鋒重ね
4	伝大分県	b	1		茎に紐のあと
5	広島県尾道市久山田町大峰916大峰山	b	2	石の下	関孔
6	島根県仁多郡横田町横田八幡宮境内	c	1		
7	〃　隠岐郡海士町竹田遺跡	b	1	溝内？	
8	〃　八束郡鹿島町志谷奥遺跡	c	6	埋納壙	外縁付鈕Ⅰ式扁平鈕式銅鐸各1
9	鳥取県東伯郡東伯町八橋田越イヅチ頭	c	4	箱式石箱の下	（小円墳）
10	〃　〃	c	1		
11	岡山県久米郡久米南町別所勝負田	？	1		尾根上
12	愛媛県周桑郡丹原町願蓮寺扇田	a	1		関孔
13	香川県観音寺市粟井町藤ノ谷	a	1	石積下	細形Ⅰ2が伴出
14	〃　善通寺市善通寺町瓦谷	b c	1 3		平形Ⅰ2、変形1、中細矛伴出
15	高知県高岡郡葉山村白雲神社蔵品	b	1		所在不明
16	〃　〃　〃　三島　〃	a	1		〃　細形Ⅱ1あり
17	〃　須崎市新荘波介	a c	2 1		関孔
18	〃　吾川郡伊野町天神溝田	a	1		中広戈1伴出
19	兵庫県佐用郡南光町平松五郎丸	b	1	積石底	
20	〃　三木市別所町正法寺	c	1		関部のみ、関孔あり
21	〃　三原郡西淡町古津路	b	13		

（註14より作成）



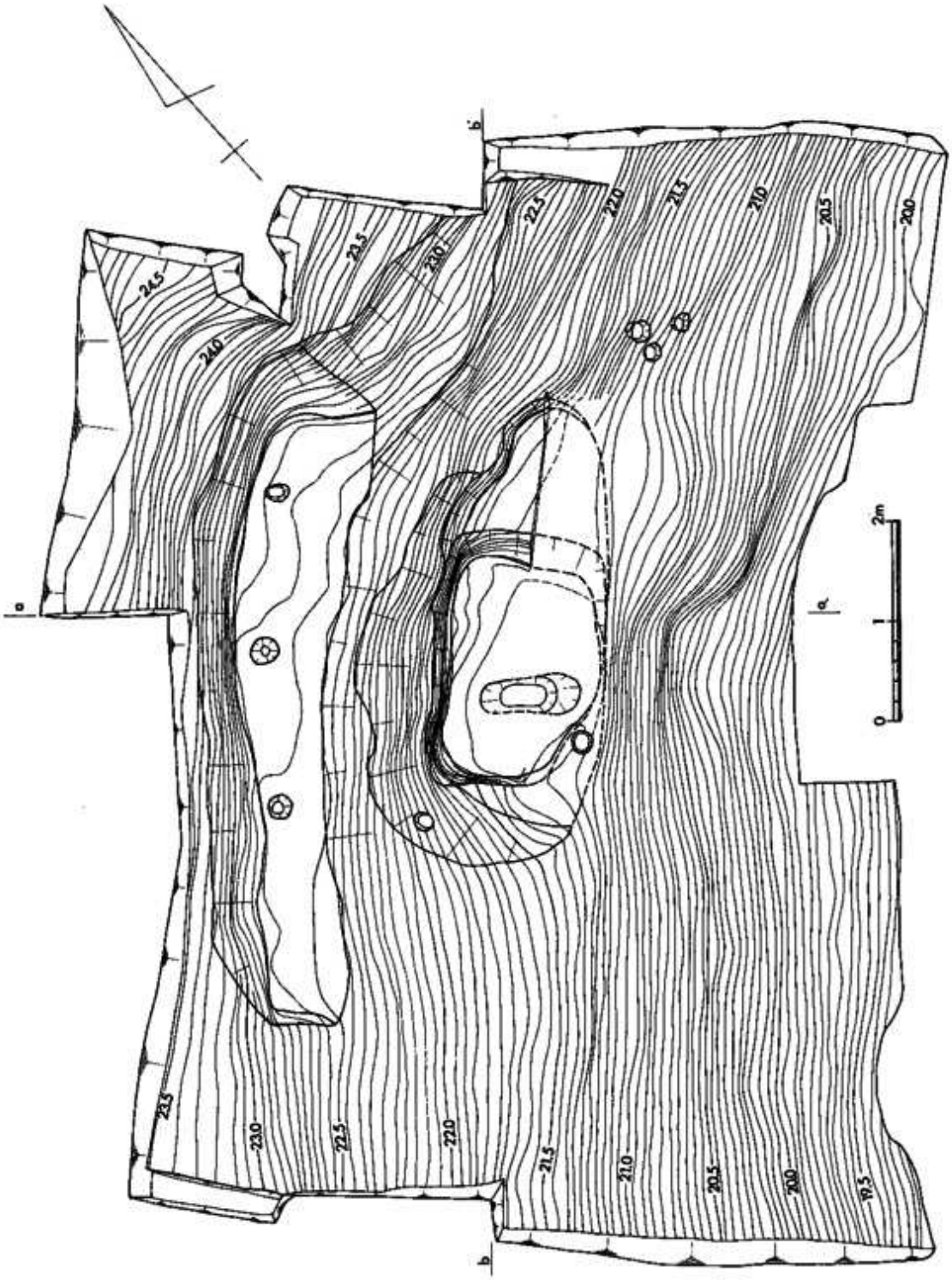
荒神谷遺跡



銅剣出土地周辺

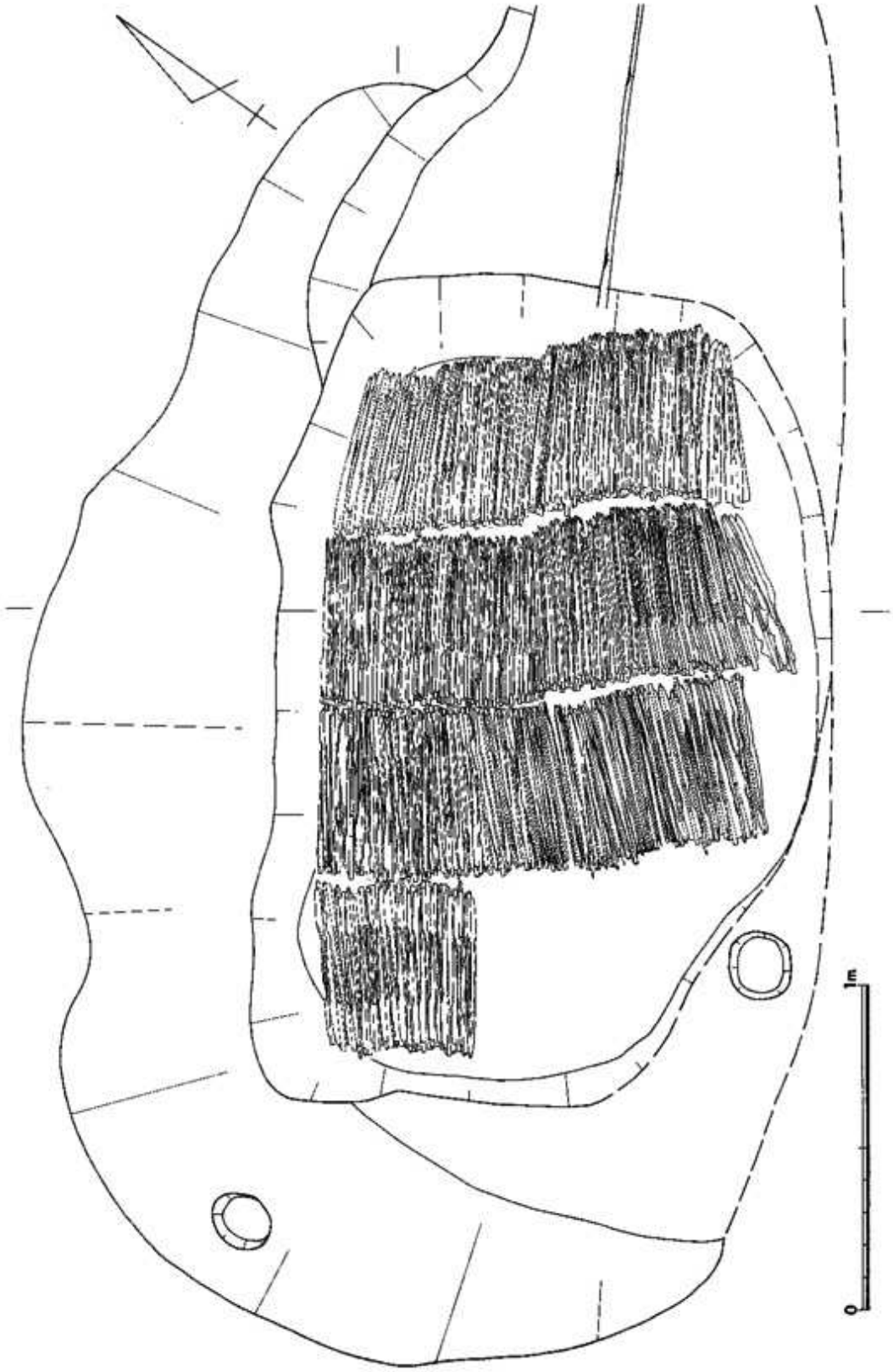
図版 2

銅剣埋納遺構実測図

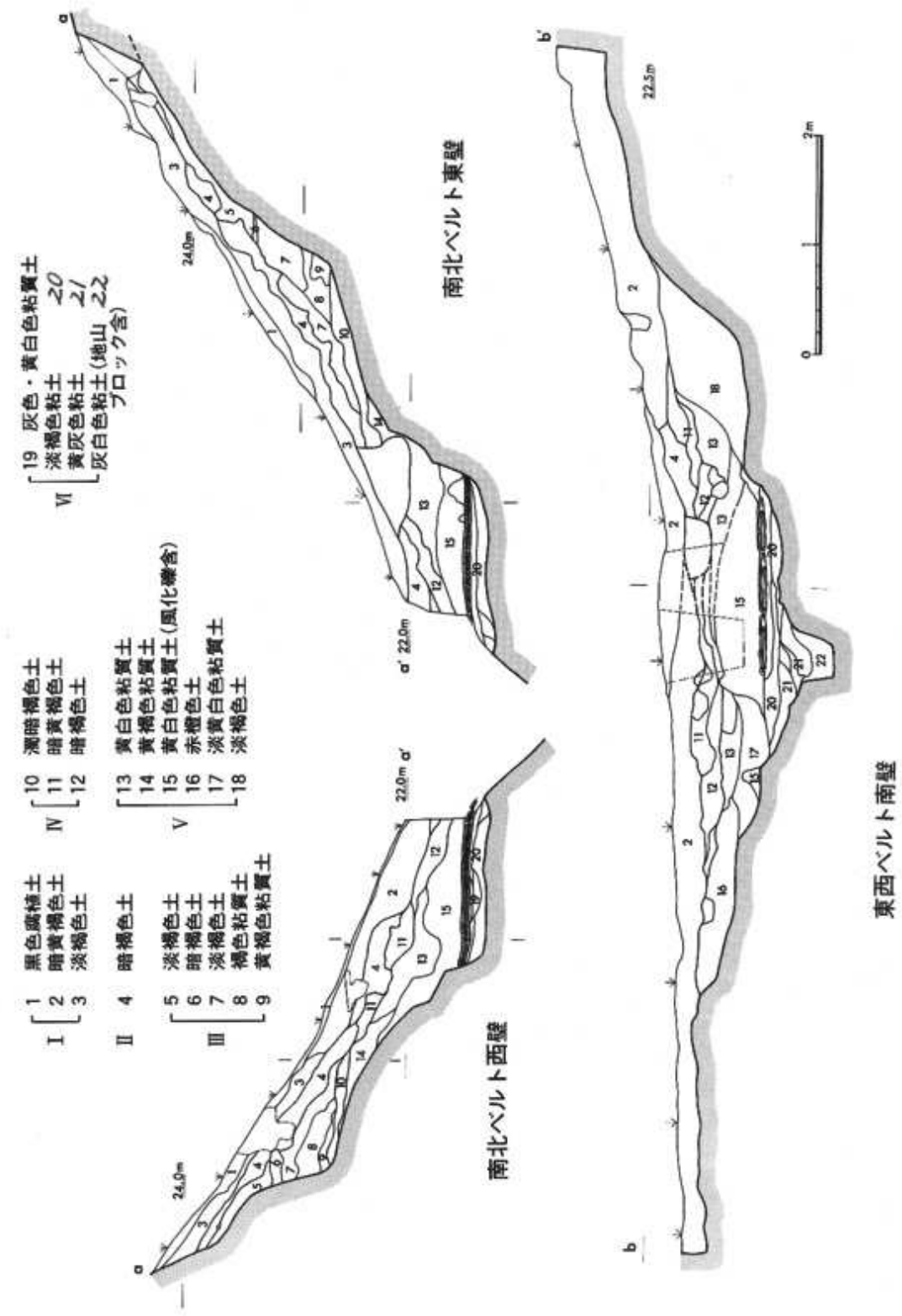


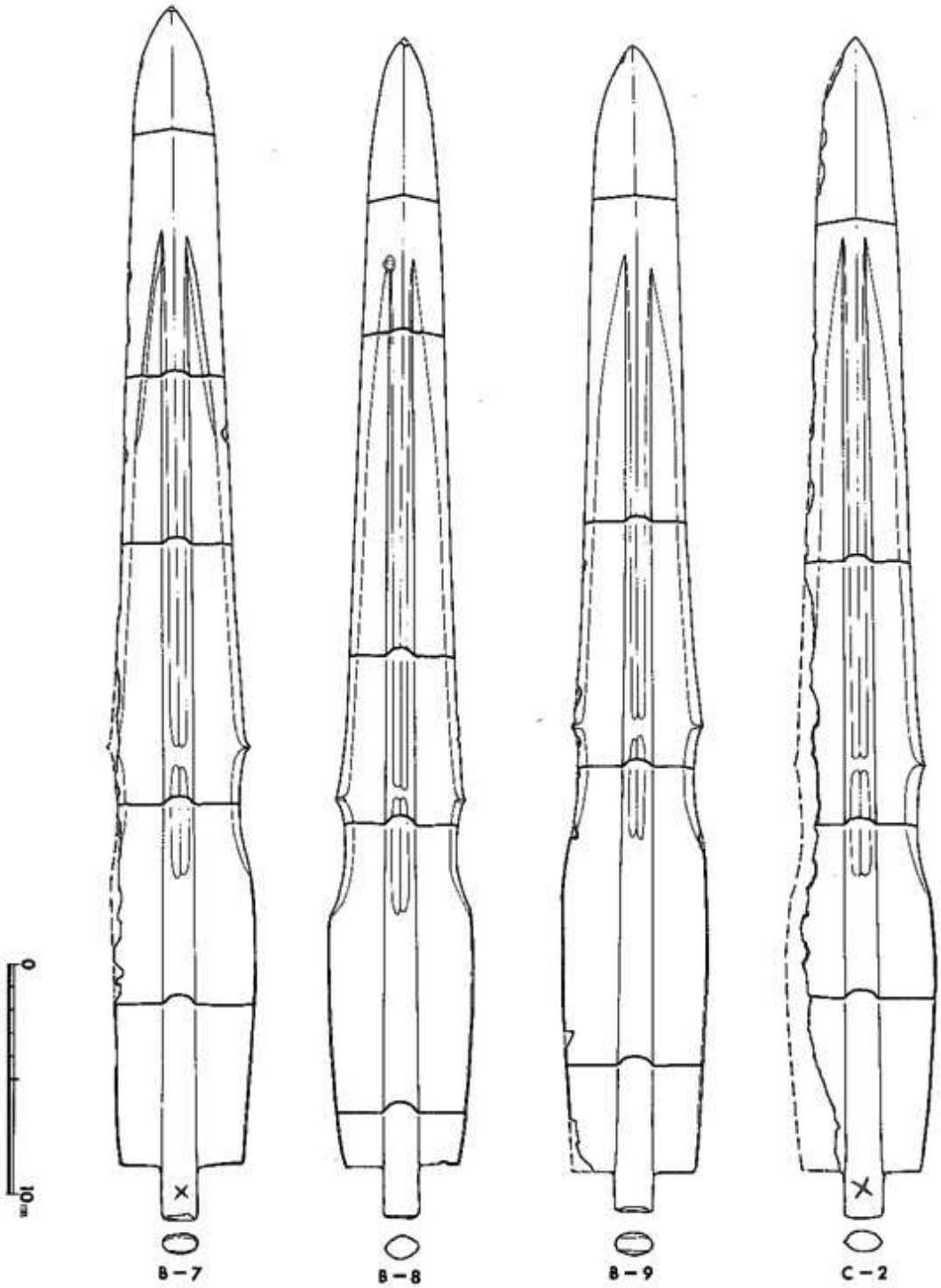
銅剣出土状態実測図

図版 3

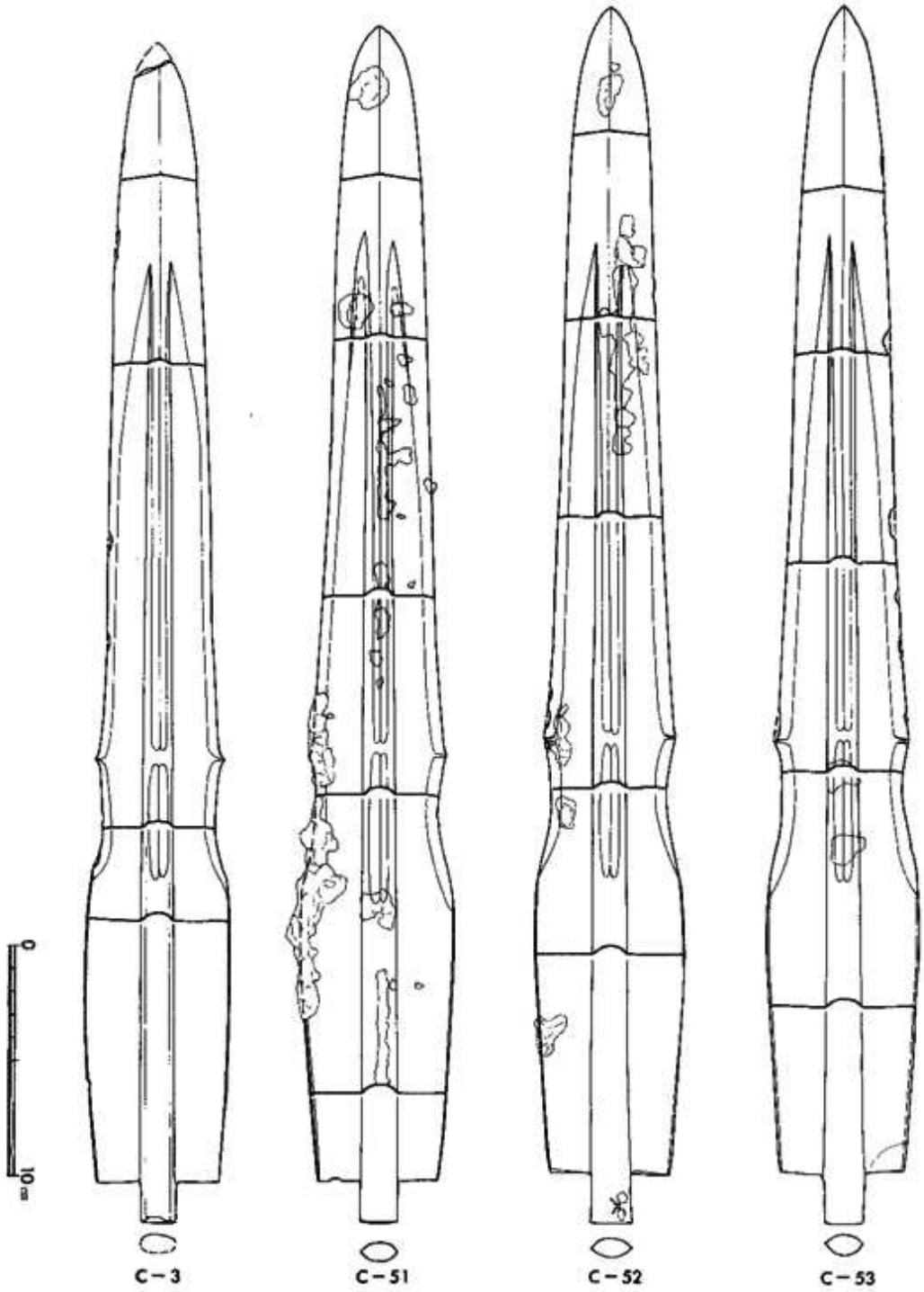


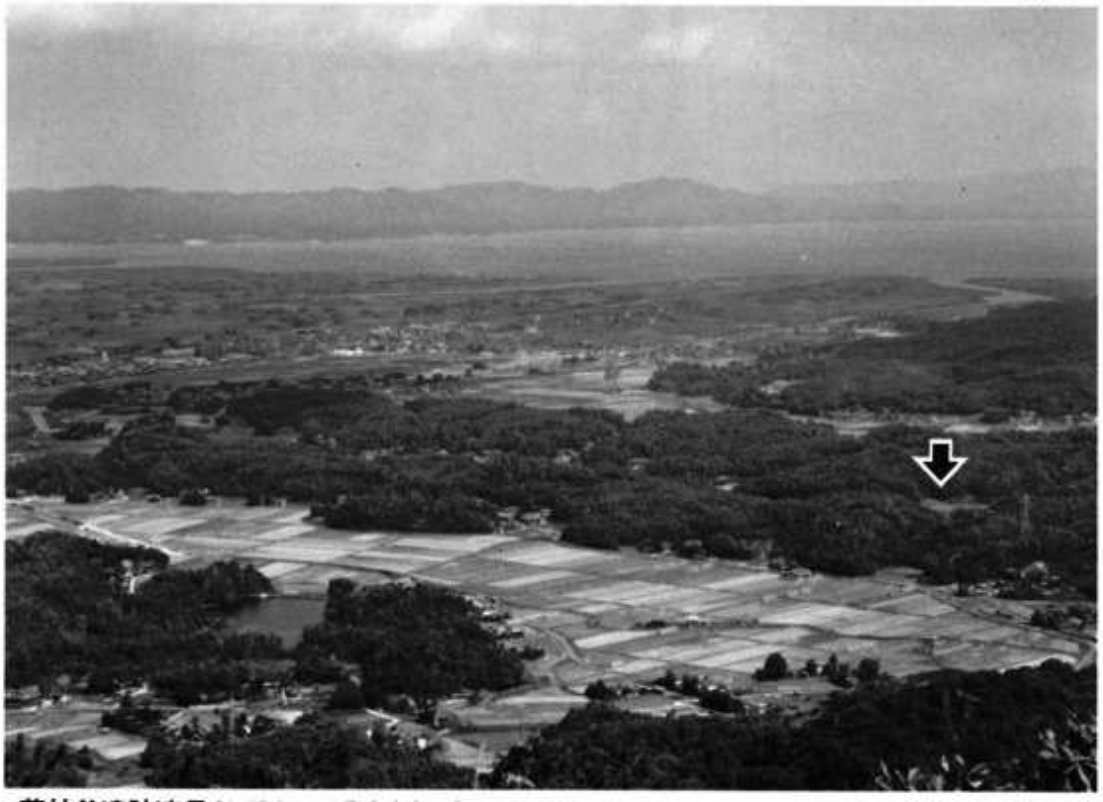
埋納遺構土層実測図


I
1 黒色腐植土
2 暗黄褐色土
3 淡褐色土
II
4 暗褐色土
III
5 淡褐色土
6 暗褐色土
7 淡褐色土
8 褐色粘質土
9 黄褐色粘質土
IV
10 濃暗褐色土
11 暗黄褐色土
12 暗褐色土
V
13 黄白色粘質土
14 黄褐色粘質土
15 黄白色粘質土(風化礫含)
16 赤橙色土
17 淡黄白色粘質土
18 淡褐色土
VI
19 灰色・黄白色粘質土
20 淡褐色粘土
21 黄灰色粘土
22 灰白色粘土(地山ブロック含)
24.0m
22.0m a'
a
南北ベルト西壁
南北ベルト東壁
b'
22.5m
b
東西ベルト南壁
0
2m


0
10cm
B－7
B－8
B－9
C－2

銅剣略測図(2)





荒神谷遺跡遠景（仏経山より北東を望む）

荒神谷遺跡全景（西より）

図版 8

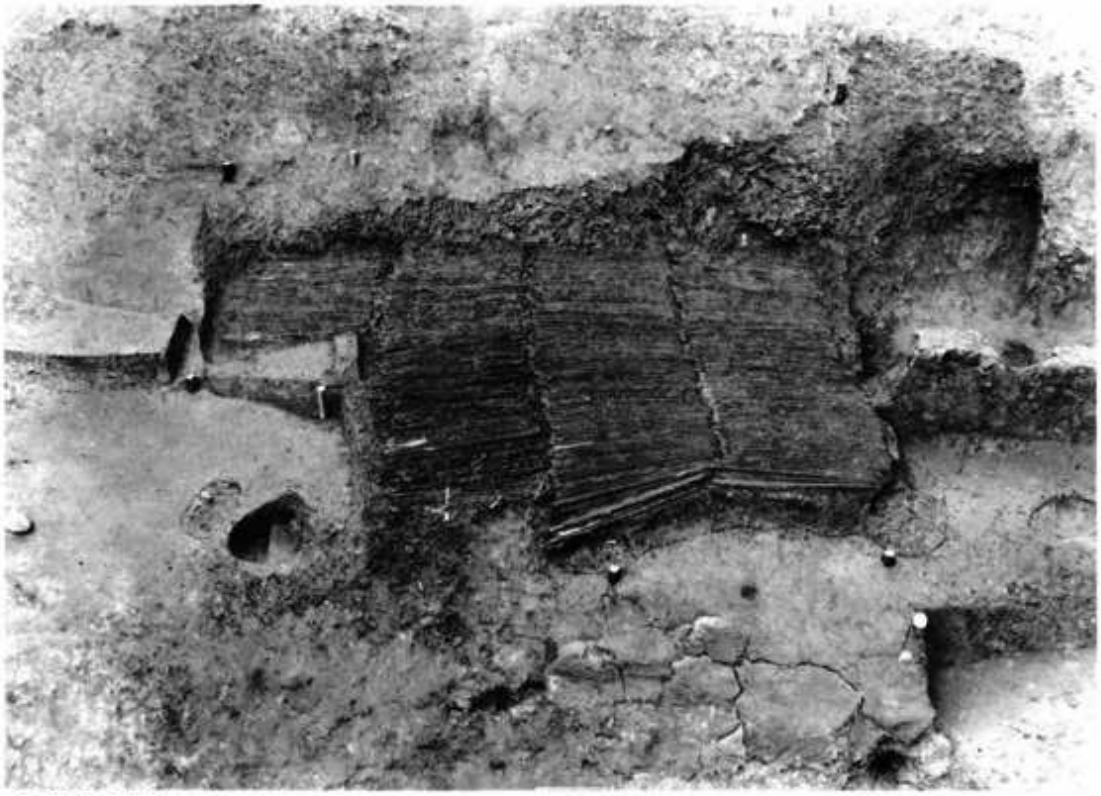
銅剣出土地調査前全景(東より)

同伐開後(同)

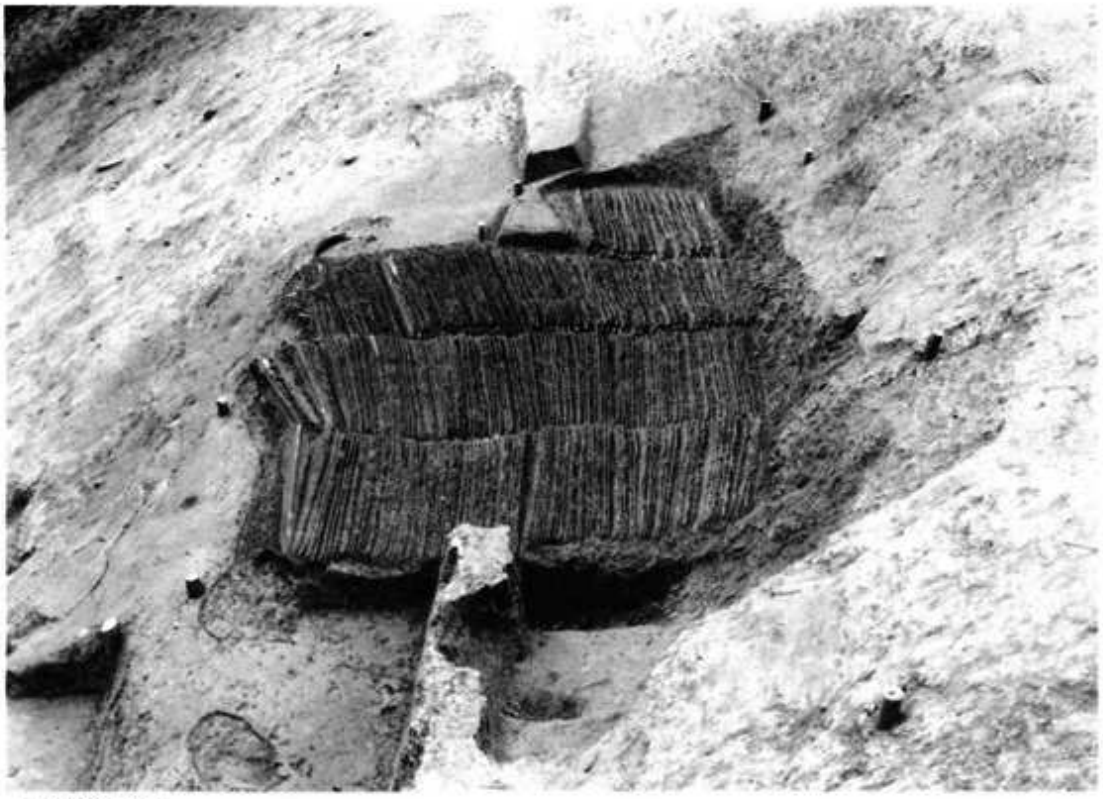
銅剣発見時の状況

埋納遺構土層堆積状況

図版10



銅剣出土状況（南東より）



同（北東より）

埋納遺構全景(北東より)

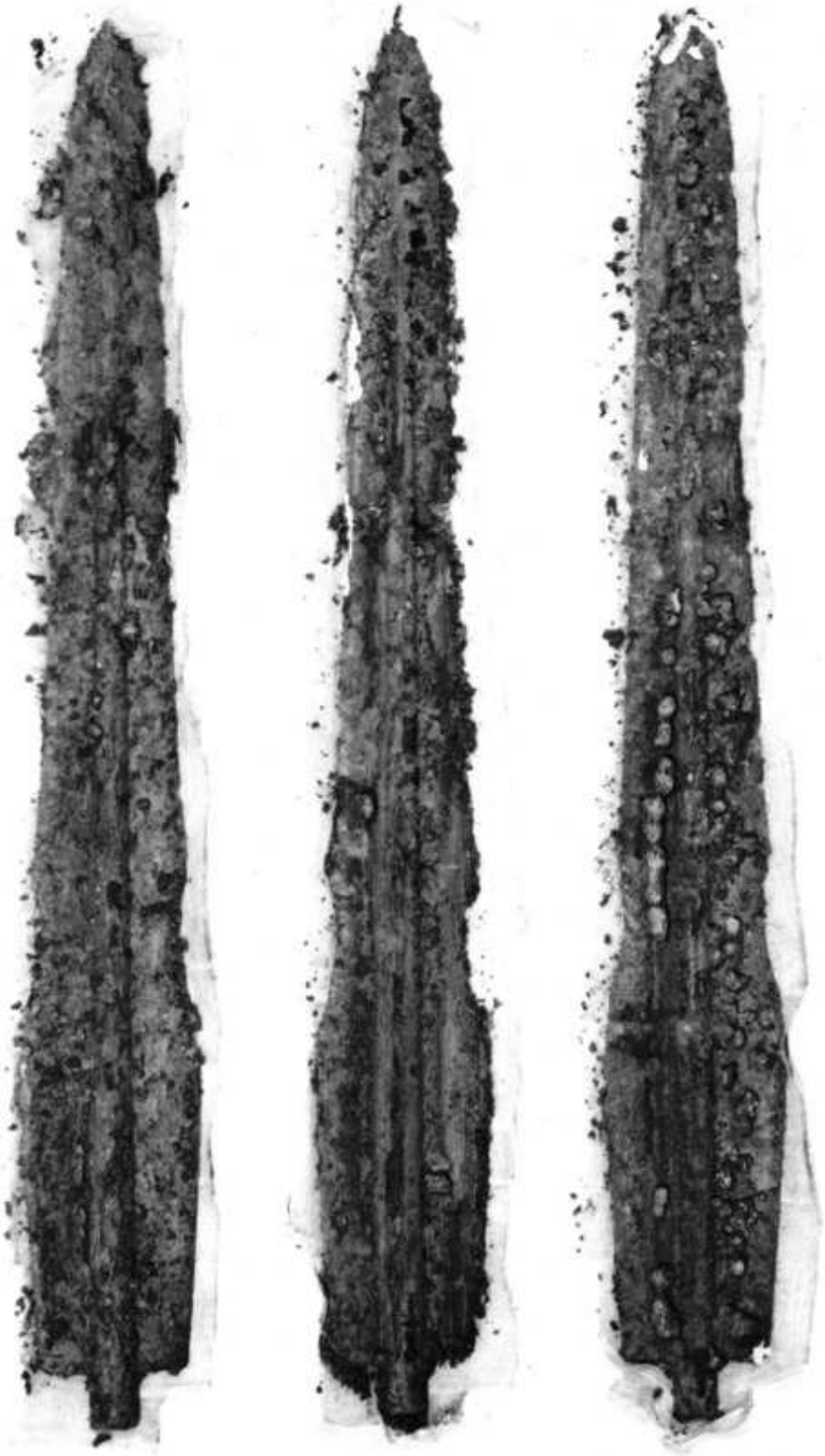
銅剣取り上げ後の状況(同)

図版12

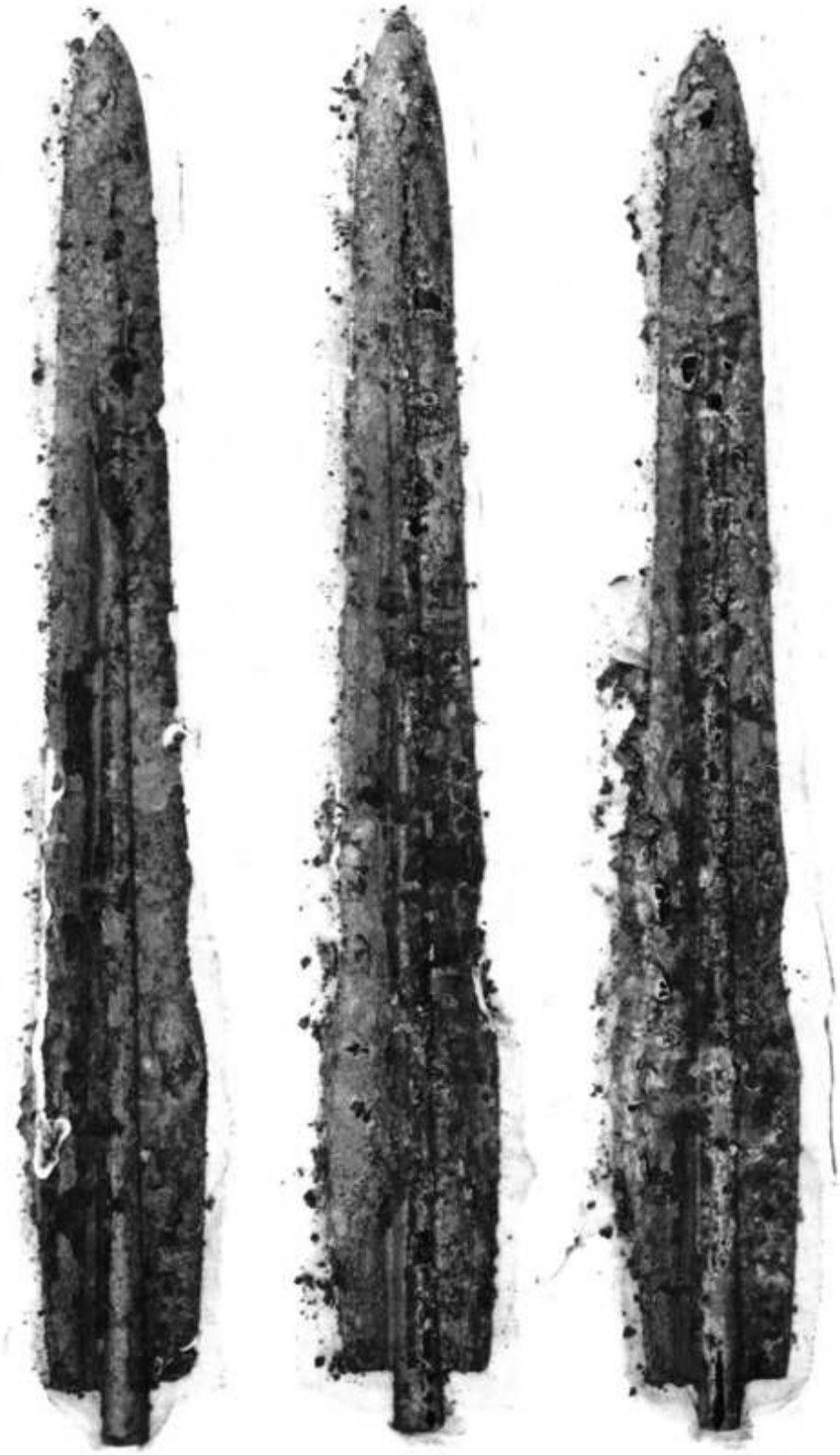
埋納遺構全景(南東より)

同(北東より)

B-9号　　B-8号　　B-7号



C-30号　　C-29号　　C-28号



C-53号　　C-52号　　C-51号

荒神谷遺跡銅剣発掘調査概報

発　行　昭和60年3月

編　集　島根県教育委員会
松江市殿町1番地

印　刷　有限会社 谷口印刷
松江市母衣町89